

メディアが取り上げた野生生物と 人との関わりを検証する

宇仁義和 東京農業大学生物産学学部(オホーツクキャンパス)

メディア研究は 削除との競争

本誌の特集のきっかけが2020年9月に新潟県燕市に出没したイノシシの捕獲に関する報道であった。イノシシを取り上げた番組では、2020年12月NHK EテレのサイエンスZERO「害獣」イノシシ研究最前線 科学の力で共生の道を」の記憶が新しい。最前線の取材映像に加え、管理を担ってきた第一線の研究者がスタジオに招かれ自ら発言する場も設けられた。発言は説明の半ばで終わってしまったとも聞か、関係者にはおおむね好評だったように思う。

他方、NHK「クローズアップ現代+」が2019年5月8日に放映

した「アーバン・イノシシ物語」ワシらが都会を目指すワケ」はメディアの悪い面が見えた。出没現場の映像や管理行政に関わる研究者へのインタビューなど最前線の状況を伝える一方、コメンテーターの発言は首をかしげるものだった。ひとりとは、映画「もののけ姫」の言葉を引用して自然界と人間が共存する道はないのか、駆除は根本的な解決にならないという、駆除と共存が相容れないという考えを披露。もうひとりにはさらに不思議な発言で、新しい価値やテクノロジーで地産地消や動物と共存する新しいスタイルが可能かも知れないという、番組の内容とは独立した夢を語ったのである。

この放送回は、現場に出掛け研究者を取材した素材収集とスタジオトークがチグハグだった例で、現場の非常な努力に対し、机上の空論で夢語りしている中央という失敗の構図を見るようだった。取材を受けた研究者が伝えたかった内容は採用されず、テレビの絵としてわかりやすく見栄する場面だけが映されたり、メディア側の解釈で誤った内容に交換されたスタジオ発言があったりした。

「クローズアップ現代+」では、

「特集ダイジェスト」として画面キヤプチャを添えてゲストとの対話の文字起こしが期間限定でネット公開される。番組サイトを見たところ原稿執筆中の4月上旬だと2019年1月放送分までは掲載されている。いずれ削除されるので、その前にローカルディスクに保存しておきたい。上述のサイエンスZEROではそのサービスは無く、放送内容を後から知るには、1週間限定の「見逃し配信」があるだけのようだ。

メディアによるメディアの 検証の検証

2010年代まで、報道番組が取り上げる野生動物のテーマは、捕鯨問題やイルカ漁の比重が大きかった。捕鯨は哺乳類を利用する最大の産業であったし、管理上ははじめから国際問題だった。イルカ漁を含め過激な環境団体の妨害行為の対象となり、それを英雄視する映画が公開されたこともあり、ナショナルリズムの話題となっていた。ところが、2019年に日本が国際捕鯨委員会(IWC)を脱退したことで、かつての国際問題としての捕鯨は消滅しテレビが取り上げることがなくなった。テレビ

写真1

ニュースステーション年末スペシャル
「イルカがあがった日」
(全国朝日放送 1990-12-28)。
1990年11月に長崎県五島列島で
発生したハナゴンドウの大量座礁を
伝えるイギリスの大衆紙
「Today」(1990-11-5)の見出し



に野生動物の社会問題枠があるとするれば、シカやイノシシの話題は捕鯨問題の後釜のようにも見える。

ニュースステーションの年末特集「イルカがあがった日」(全国朝日放送1990-12-28、写真1)は、1990年11月に長崎県五島列島で起きた600頭のハナゴンドウの座礁を巡り、日英メディア各社の報道内容の事実検証をおこなった優れた調査番組である。現地関係者や報道機関、日英の研究者やイギリス市民への直接の取材をもとに、座礁が自然現象だったのか漁師の追い込みによるものかという事実の追及、国内各社の報道内容の検証、そしてイギリスのメディアがどのような視点で報道したのかを明らかにしたものだ。特集の取材によって、漁民による積極的な追い込み漁業はおこなわれなかったが、座礁したイルカは血抜きのおえ一部は食用に出荷されたことが確認されている。

映像では、全国紙や通信社の配信内容を比較した結果、それぞれ異なった内容の報道をしたこと、イギリスのメディアは「漁師が追い込んだ」状況や内容を深く理解せず、言葉だけを受け取り「全人類の恥」や「真実までも切り刻むジャップたち」と報じたことを確認する。さらに番

組では英国新聞社の報道部にインタビュース、イルカを食べる行為自体が受け入れがたいという答えを引き出す。特集の結論は、座礁への人為的影響は不明、イギリス人が重視したのは座礁が人為的か否かという点ではなく、イルカを殺して食べたこと自体にあるとした。捕鯨やイルカ漁に対する文化的優越感や人種差別感をあぶり出したといつてよい。

「イルカがあがった日」は、優れた番組を顕彰する放送批評懇談会、ギャラクシー賞奨励賞を得ている。30年前の状況では電話取材が通例で写真や映像を欠いたままの執筆、イルカの座礁状況や利用への段階についての知識不足、そのなかで執筆を強いられる記者の判断とその自己評価など個人レベルの葛藤を描き、イギリス報道機関の深層心理を露わにするなど、メディアの深い部分にまで踏み込んだ1時間近くの力作である。ところが、この番組のネット情報はギャラクシー賞のページ1件のみで所蔵機関にたどり着くことさえ難しい。筆者がこの番組を視聴できたのは、長老鯨類研究者から寄贈を受けたビデオテープに含まれていたという偶然による。このような優れた番組にアクセスできないのは文化的損失ではないだろうか。



写真2

機銃でシャチを駆除する様子(宇仁 2014)。
NHKアーカイブス保存映像「NHK週間ニュース:
巡視船で鯨退治(瀬戸内海)」1957-4-12



写真3

漂着したアカボウクジラに乗る人たち。
NHKアーカイブス保存映像「NHKニュース:
葉山海岸に2頭のクジラ迷い込む(神奈川県)」1966-9-1

放送アーカイブは
有力な調査対象

偶然ではなく、過去のテレビ番組を組織的に保存公開しているのが放送アーカイブである。国内では質量ともにNHKアーカイブス(埼玉県川口市)が充実している。一般に公開されているのは限られた番組のみであるが、研究者に向けた「NHK番組アーカイブス学術研究トライアル」というプログラムがある。採択されるとNHKの職員とおなじメタデータにアクセス可能で、ほぼすべての保存映像が視聴できるという夢のような制度がある。残念ながら

現在ではニュースは視聴対象外となっているようだが、筆者がニュースを含めて調査した内容を紹介したい。調べた内容は、鯨類の座礁漂着記録である。NHKアーカイブの収蔵番組には40年余りの期間の座礁漂着記録は31件あり、うち14件は学界に知られていない新たな情報だった(宇仁ら2015)。内訳はすべてがハクジラ亜目で種別ではアカボウクジラがもっとも多く、小型のミンククジラが多数を占める近年の漂着状況とは相当に異なる。これは小型捕鯨の中断やその他の漁業の影響に加え、時代による関心の違いを反映したものであろう。

座礁や迷入した鯨類に対する人び

との態度も可視化された。1950〜60年代ではシャチが巡視船の機銃掃射の後に小型捕鯨船によって駆除され(宇仁ら2014、写真2)、漂着したアカボウクジラは見物人が上に立ったり蹴り上げを受け(写真3)、コビレゴンドウは生きたまま土に埋められていた。これが1970年代になると座礁や迷入個体を水族館に持ち込み飼育を試みる映像が目立ち、人びとの鯨類に対する態度は敵対的なものから友好的なものに変化しているように見える。調査の様子を伝える映像は皆無に近く、体長をメジャーで計測する事例が1980年のわずかに1件のみあった。20世紀半ばから40年の間に、人びとの鯨類に対

The evolution of a misquotation

We gave you six things Darwin never said (despite what you may read elsewhere).

None of the fake soundbites is more insidious than the first:

“It is not the strongest of the species that survives, nor the most intelligent that survives. It is the one that is most adaptable to change.”

It is all over the web, and is prominently placed in the stone floor of the headquarters of the California Academy of Sciences (though the original attribution to Darwin has since been removed).

Nicholas J. Matzke, of the Department of Integrative Biology, University of California, Berkeley, worked out its history. As you can read on Nick's blog, the source is the writings of Leon C. Megginson, Professor of Management and Marketing at Louisiana State University at Baton Rouge. The quote started out as a paraphrase. Megginson wrote in 1963:

“According to Darwin's *Origin of Species*, it is not the most intellectual of the species that survives; it is not the strongest that survives; but the species that survives is the one that is able best to adapt and adjust to the changing environment in which it finds itself.”

Megginson, 'Lessons from Europe for American Business', *Southwestern Social Science Quarterly* (1963) 44(1): 3-13, at p. 4.

(A similar version is in Megginson's article 'Key to Competition is Management', *Petroleum Management* (1964) 36(1): 91-95.)



Darwin didn't say...
after CUL DAR 225: 175
Cambridge University Library

写真4
ダーウィンの発言とされる偽語録を収集し、その起源と放散を考察する
ケンブリッジ大学のサイト「誤引用の進化」
The evolution of a misquotation |
Darwin Correspondence Project

する態度は、駆除対象や食糧とする見方から愛玩的な態度へと変化した一方、調査研究に取り組もうという科学的態度は未形成だったといえよう。

このような態度変化は通常は文章で記され、引用の対象となっていく。しかし、文章だけでは事実性が担保されないうえ、記された内容を正確に理解することも難しい。写真や映像があつて初めて事実確認が可能であるし、それを見る者は事実をわずかながら追体験するのである。

メディアを検証訂正する
ウェブサイト

研究者の発言がメディアで誤って報道されることや意図的な改変が加えられることは日常茶飯事である。かつては訂正を広く知らせる方法が無かったが、現在ではネットの利用で訂正や正しい情報発信が可能となっている。急ぐ場合はまずSNSで発言しておき、その後ウェブページで詳しい解説を加えると効果的である。ウェブページは情報をコントロールできる独自メディアとして活用していきたい。一過性のニュースや記事だけでなく、広く行き渡ってしまつた誤解や間違いを正していく

努力を続けることも必要だろう。

ダーウィンの言葉としてよく知られる言葉にも他人による発明が含まれるという。ケンブリッジ大学のウェブサイトに「誤引用の進化」(写真4)は、偽語録を収集し出典や出現時期などを追求してその進化を考察するサイトである。ユーモアを含む試みで研究者の情報発信の仕方として大いに参考になる。

本学会の仕事として、テレビやネット動画など影響の大きい情報について、画像や映像そして発言内容を記録検証し、必要ならば正しい情報を発信するネット活動に取り組むべきかも知れない。人材不足ではあるが真剣に考慮していくべき事柄と考える。

引用文献

宇仁義和 二〇一四 『NHKアーカイブス保存映像の文化人類学的調査の可能性』北海道民族学、一〇七七一八六。
宇仁義和・谷田部明子・石川創 二〇一五 『NHKアーカイブス保存映像のなかの鯨類ストラディンク』日本セトロジー研究、二五二一七六。



宇仁義和
うに よしかず

東京農業大学教授。学芸員養成課程の傍ら、ベッコウ、捕鯨、毛皮産業と鳥獣海獣の産業利用の記録を収集している。明治から戦前を中心に、写真による仕事や暮らし、景観や植生の検証にも取り組む。